

平成29年漁期 すけとうだら漁獲可能量(TAC)案について

資料2-5

(単位:万トン)

魚種	系群	資源状態		ABClimit(日本EEZ)					TAC				備考
		水準	動向	26年	27年	28年	29年	漁獲シナリオ (管理基準)	26年	27年	28年	29年 (案)	
すけとう だら	<p>【中期的管理方針】</p> <p>日本海北部系群については、極めて低い資源水準で推移しており、かつ近年の海洋環境等も資源の増大に好適な状態にあるとは認められない。親魚量がこれまでの最低水準を下回らないよう注意しつつ、着実な資源の回復を基本方向として管理を行うものとし、資源管理計画に基づく取組の推進を図るものとする。太平洋系群については、一定の親魚量の確保を通じ、豊度の高い年級群の発生により資源水準を維持することを基本方向として、漁獲動向及び加入動向に注意しつつ、管理を行うものとする</p> <p>その他の系群については、ロシア連邦の水域と我が国の水域にまたがって分布し、同国漁船によっても採捕が行われていて我が国のみでの管理では限界があることから、同国との協調した管理に向けて取り組みつつ、当面は資源を減少させないようにすることを基本に、我が国水域への来遊量の年変動にも配慮しながら、管理を行うものとする。</p>												【29年TAC設定の考え方】
													【日本海北部系群】 中期的管理方針に則して「③親魚量の増大(0.63万トン)」と同数のTAC(案)6,300トンとする。
													【オホーツク海南部】 中期的管理方針を踏まえ、ロシア水域とのまたがり資源であることから、来遊状況が良好な場合に対応できる数量として、近年の最大漁獲量である24年漁期の52,023トンに基づき、TAC(案)53,000トンとする。
													【根室海峡】 中期的管理方針を踏まえ、ロシア水域とのまたがり資源であることから、来遊状況が良好な場合に対応できる数量として、近年の最大漁獲量である23年漁期の19,115トンに基づき、TAC(案)20,000トンとする。
													【太平洋系群】 中期的管理方針に則して「②親魚量の維持(18.4万トン)」と同数のTAC(案)184,000トンとする。
	日本海北部	低位	横ばい	0.65 (0.90)	0.74 (0.68)	0.83	0.63	親魚量の増大(③)	1.3	0.74	0.83	0.63	
	オホーツク海南部	低位	減少	-	-	-	-	-	5.3	5.3	5.3	5.3	
	根室海峡	低位	横ばい	-	-	-	-	-	2.0	2.0 (2.7)	2.0	2.0	
	太平洋	中位	減少	15.7 (21.0)	17.7 (18.3)	18.0	18.4	親魚量の維持(②)	17.1 (21.0)	17.7 (18.3)	18.0	18.4	
合計									25.7 (29.6)	25.74 27.04	26.13	26.33	

注1)オホーツク海南部及び根室海峡は、詳細な生態や資源状況が不明なことから、ABCの算定を行っていない。

注2)26年と27年のABClimit欄下段()書きは、再評価の数量。TAC欄下段()書きは、期中改定後の数量。

資源評価結果

すけとうだら	資源の状態		資源量(親魚量)の状態	漁獲シナリオ (管理基準)	2017年 ABC (千トン)	参 考	
	水準	動向				2015年 親魚量	Blimit
日本海北部系群	低位	横ばい	<Blim	ABClimit		41千トン	親魚量 154千トン
				*① 親魚量の増大(10年でBlimitへ回復)(Frec10yr)	1.9		
				*② 親魚量の増大(20年でBlimitへ回復)(Frec20yr)	5.1		
				*③ 親魚量の増大(30年でBlimitへ回復)(Frec30yr)	6.3		
オホーツク海南部	低位	減少	—	—	一注1	—	未設定
根室海峡	低位	横ばい	—	—	一注1	—	未設定
太平洋系群	中位	減少	>Blim	ABClimit		349千トン	親魚量 151千トン
				*① 現状の漁獲圧の維持(Fcurrent)	110		
				*② 親魚量の維持(Fsus)	184		

注1)オホーツク海南部及び根室海峡については、既存の情報からは資源量の算定が困難なことから、ABCの算定は行っていない。

注2) * のついたシナリオが中期的管理方針に合致する。